http://decfamily.p1.bindsite.jp/2016/

We 13R

No.034　16/05/27

静かに無言で礼を尽くす

日比谷の卒業生で、イタリア在住の作家、塩野七生（しおのななみ）さんが、オバマ大統領の広島訪問に関して、昨日（26日）の朝日新聞に傾聴すべき意見を発表されている。引用しておこう。

＊

―オバマ大統領が被爆地・広島を訪問することを知ったとき、まず、どう感じましたか。

「知ったのは、ローマの自宅でテレビを見ていた時です」（中略）

「特に、日本側が『謝罪を求めない』といっているのが、大変に良い」

―どうしてですか。

「謝罪を求めず、無言で静かに迎える方が、謝罪を声高に求めるよりも、断じて品位の高さを強く印象づけることになるのです」

「『米国大統領の広島訪問』だけなら、野球でいえばヒットにすぎません。そこで『謝罪を求めない』とした一事にこそ、ヒットを我が日本の得点に結びつける鍵があります。しかも、それは日本政府、マスコミ、日本人全体、そして誰よりも、広島の市民全員にかかっているんですよ」（中略）

―米国の現職大統領が、かつて自分と同じ職だった者が原爆投下を命じた地を訪れる、その意味をどう見ますか。

「広島を息子に見せる目的で、一緒に訪れたことがあります。息子はイタリア人です。原爆を投下した国の、アメリカの人間ではありません。でも、原爆ドームを見、平和記念資料館の展示をすみずみまで見、原爆死没者慰霊碑の前に立っている間、彼は一言も発しなかった。その後も感想らしきことは一言も言いません。簡単には口にできない重さに圧倒されていたのでしょう」

「あの日、私も考えました。原爆の犠牲者たちは、７０年後を生きるわれわれに、ほんとうは何を求めているのだろうか、と」

「もしかしたら、通りいっぺんの謝罪よりも、安易な同情よりも、被爆地を自らの足を使ってまわり、一人一人が感じ、その誰もが自分の頭で考えてくれることのほうを望んでいるのではないか」

「オバマ大統領だけでなくサミット参加各国のトップたちが広島を訪問したら、それはアメリカ人だけではなく世界中の人びとに、それをさせる素晴らしいきっかけになりうるんですよ」（中略）

―日本は今回どうすれば良いと思いますか。

「ただ静かに、無言のうちに迎えることです。大統領には、頭を下げることさえも求めず。そしてその後も、静かに無言で送り出すことです」

「原爆を投下した国の大統領が、７０年後とはいえ、広島に来ると決めたのですよ。当日はデモや集会などはいっさいやめて、静かに大人のやり方で迎えてほしい」

「われわれ日本人は、深い哀（かな）しみで胸はいっぱいでも、それは抑えて客人に対するのを知っているはずではないですか。泣き叫ぶよりも無言で静かにふるまう方が、その人の品格を示すことになるのです。星条旗を振りながら歓声をあげて迎えるのは、子どもたちにまかせましょう」（後略）

＊

ここに述べられている「感覚」は、結構私の感覚に違いが、君たちはどう思いますか？